

平成24年度 公益財団法人大阪市博物館協会の事業評価

自然史博物館の運営状況（総括） 【シート3】

H23年度を中心とする指定管理期間の自己評価		外部評価 << 委員コメント総括 >>	
事業区分	重点目標	詳細	
1 資料の収集、保存、活用	地震対策	液浸収蔵庫における液浸標本の転倒防止のためのコンテナ収納を計画的に進めている。予算の不足によりコンテナ購入が不十分などの要因もありながら作業を進め、液浸収蔵庫上段については7割、液浸収蔵庫下段については4割を終了することができた。これ以外に、標本瓶を奥に移動させる等の努力を行った。なお一般収蔵庫上段には旧収蔵庫で使用していた標本棚・タンスを使用しているが、連結することにより転倒防止の対策はできている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多忙なうえに予算がない中、標本の安全確保に取り組んでいる点を評価する。収集標本の恒久的保存は、博物館機能の中核であるから、貴重な収蔵標本が安全に保存できない環境は、早急に改善すべきである。その必要性を施設設置者(大阪市)に伝え、予算を措置するように促す必要性が高い。</li> <li>・学芸員による資料の収集と、自然史博物館への信頼にもとづく寄贈による重要な資料が増える中、資料の収蔵スペースが不足し、整理が進まないのは、寄贈者等の信頼を損なうことにつながりかねない。こうした懸念について、施設設置者(大阪市)に伝え、予算を措置するように促す必要性が高い。</li> <li>・また、資料の公開に結びつく問題として、標本資料のデジタル化をどのように進めるべきかについては、今後も資料が増加することが見込まれるので、早急に検討することが望まれる。</li> <li>・資料を有効に活用して特別展などの充実を図っていることを評価する。</li> <li>・団塊世代の退職に伴って、外来研究員の希望者が増えることが予想される。それに伴い、外来研究員の研究スペースや機材の不足が予想される。この対応について、施設設置者(大阪市)に必要性を周知する必要がある。</li> <li>・また、今後は研究者だけでなく、より幅広いアマチュア層が資料にアクセスできる制度も検討してほしい。</li> </ul>
	資料の収集	博物館資料の充実のための学芸員による資料収集、寄贈標本の受け入れなどにつとめており、各分野で収蔵資料が充実してきている。昆虫・植物・鳥類など模式標本も含めた寄贈、学芸員の収集により、毎年度年約2万～3万点程度増加しており、23年度末では資料総数は148万8,948点となっている。順調に増えつつある一方で、標本データのデジタル化など、その整理は追いついていないという課題がある。また、購入費用を要する標本については予算削減のために増加していない。	
	資料の活用	当館研究関係印刷物、特別展で標本を活用しており、23年度実績では、研究紀要である「自然史研究」で1編を発行、「研究報告」の掲載論文4編中3編で使用するなど活用している。主催展の第42回特別展「大化石展」では収蔵資料約900点を展示して、好評を得た。また他施設での展示に11件を貸し出し、普及教育に3件利用するなど活用に努めており、目標は達成できたと考えている。	
	市民による資料の活用	外部研究員制度(外来研究員)を活用した資料の活用と研究成果の公表を進めていて、23年度については受け入れた外部研究員は31名、外部研究員によって公表された研究成果は31本(論文)であった。目標は達成できたと考えている。	
2 調査・研究	大阪の自然史の解明	市民連携による都市域の自然環境・生物相の解明を目的としたプロジェクト研究を23年度から開始している。24年度には23年度の研究成果を元に野外観察会や講演会の実施を行った。目標をほぼ達成することができたが、分野によっては一部進行が遅れている部分がある。26年度に研究成果や収集資料を基にした特別展を開催する予定である。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市民と協働して大阪の自然史の解明に取り組む姿勢はとても共感できる。26年度の特別展の開催に向け、計画的に調査を進めるとともに、より多くの市民を巻き込む工夫を望みたい。</li> <li>・資料収集や普及教育事業に多くのエネルギーが割かれる中、研究面でも大きな成果をあげていることを高く評価する。より質の高い成果をあげ、今後の外部資金獲得につなげられるよう、博物館全体で研究時間の確保に努めてほしい。</li> <li>・博物館独自の「自然史博物館研究報告」を継続して刊行できている点、また様々な研究活動や学会活動にも活発な点を、とくに高く評価する。そうした中で「自然史リポジトリ」を設け、館の研究紀要をインターネット上で全文公開するとともに、CiNiiへの機関契約によってCiNiiから本文リンクでたどれる点も、社会への研究成果の還元という点で評価できる。</li> </ul>
	競争的資金獲得による研究環境の充実	23年度は文部科学省・日本学術振興会の科研費補助金については基盤研究B1件、基盤研究C4件、若手研究B3件(合計約1,500万円)を獲得でき、DNAシーケンサーの導入など、設備面も含めて目標を達成することができた。24年度は基盤研究A1件、基盤研究B1件、基盤研究C4件、若手研究B3件、特別研究員奨励費(合計約1,300万円)を獲得できたほか、民間助成も1件獲得し、目標を達成できた。	
	研究成果の公表	「大阪府立自然史博物館研究報告」の出版と各種学術誌への論文公表、学会での発表を積極的に行うことにより、23年度には、自然史博物館研究報告の出版(原著論文4本掲載)と公表論文30本(研究報告以外)、著書・報告30本、学会発表30件を行った(外来研究員を除く)。定常的な研究資金の少ない中、科研費補助金など外部資金獲得者以外も積極的に研究成果の公表を行っている。今後とも、博物館学的な研究も含めより多くの発表を目指している。	
3 展示(常設展示、特別展)、来館者サービス	館蔵標本の有効活用	23年度は化石標本をもとにした特別展「大化石展」を開催し、特別陳列としては全分野の新収蔵標本を展示した新収資料展を開催した。特別展「大化石展」では、900点の化石を展示し、30,159人の入場があった。新収資料展では2万点の標本を展示し、7,889人の入場があった。常設展では見られない標本を多くの市民に公開し、目標を達成できた。24年度は特別展「のぞいてみよう！ハチの世界」を開催し、昆虫標本14,210点、ハチの巣1,206点と大量の標本、学芸員の研究活動の成果である観察映像を展示した。27,087名の来場者を得、高い満足度を得た。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでに蓄積してきた収集資料を積極的に活用した特別展「来て！見て！感激！大化石展」(23年度)「のぞいてみよう ハチの世界展」(24年度)はともに見ごたえのある展示になっていた。実物資料をふんだんに見せるのは、博物館の大事な使命であり、今後も継続してほしい。「ハチの世界展」では長時間熱心にメモをとったり、真剣に標本に見入る入場者の姿が見られた。</li> <li>・限られた予算の中で展示環境を改善していることを評価する。</li> <li>・災害関連など市民にとって関心の高いテーマを取りあげていることを評価する。ただ、こうしたミニ企画展、パネル展とも、広報・周知が十分でなかったと感じられた。今後、広報・周知の効果的な実施について検討されたい。</li> </ul>
	展示環境の改善	23年度に常設展示室の天井照明の一部と展示ケース内のスポット照明の大部分をLED化し、恐竜や象などの全身骨格標本に照明演出ができるよう配置した。高演色性のLED採用で展示資料がより鮮明に見えるようになり、見るべきポイントを強調する照明ができた。影の演出で過去の生物であることを感じられる展示とできた。	
	常設展示内での情報発信	時宜に応じた活動成果・研究成果の発信を行っており、23年度には常設展示を補完するミニ企画展示として「大阪のタンポポは今 2010年の市民調査から」、パネル展「今 地震・津波を考える」を開催した。学校観覧者、特別展への来場者などに情報を提供し誘導することができたが、予算的裏付けがないことで不十分な面もあった。	

4 教育普及、学習支援、友の会、ボランティア	博物館コミュニティの育成	友の会の活動を充実させ、将来の友の会活動の担い手を育成することも狙いとして、23年度には、友の会主催の行事として44回の普及行事を実施し、2,237名の参加があった。友の会会員は博物館主催行事にも多数参加いただいております、目的は達成され手いと考えている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全国的に見ても有数の会員を有する友の会が普及教育事業の中心になり、博物館コミュニティが形成されて成果をあげていることは、大阪市立自然史博物館の優れた特徴になっている。これは博物館スタッフの地道な努力によるもので、高く評価できる。</li> <li>・友の会会員が中心の市民参加型調査が成果をあげ、それが特別展につながっているのは、市民協働の理想的展開として評価できる。これは全国の博物館のモデルになるものである。今後は市民参加型調査の実施に当たっての留意点などをまとめ、他館に情報発信していくことが期待される。市民参加によってできた博物館ファンのネットワークは、博物館の、そして大阪という町の宝なので、これを大事にしてほしい。</li> <li>・地道な活動が博物館コミュニティづくりには重要である。今後も普及事業に力を入れてほしい。</li> </ul>
	市民参加型調査の実施	平成26年の都市の自然展開催をめざしプロジェクトUを立ち上げ、市民参加型の調査を実施した(14回実施、のべ246名参加)。参加している市民は約100名で、24年度はさらに広がりを見せている。	
	普及行事の充実	22年度には資料収集事業や調査研究との連携ができる標本収集の担い手育成として標本実習の充実を企画し、新たに室内実習として「昆虫標本の作り方」を実施した。申し込み・参加者数とも同年に行われた実習の中では最も多かった(申し込み109名 当選73名 参加51名)。23年度は小学生などが気軽に参加できる企画として24回のミニWSを実施し、のべ3,492名の参加があった。目標を達成できた。	
5 学校等との利用促進、学校教育支援	高等学校との連携	23年度は3つの特別展で、現場の教員に協力してもらって高校生向けのワークシートを作成。また大阪府高等学校生徒生物研究発表会を館共催の行事として開催した。高校生以上の来場数増と生徒の学習に一定の効果が出ており、教員からも好評を得た。生徒生物発表会では、一般来館の見学者もあった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校連携の多くが小中学校向けのものであり、高等学校との連携に力を入れていることは、次世代養成の継続した試みとして評価できる。</li> <li>・事業が順調に展開していることを評価する。「教員のための博物館の日」を始め、館の多くの事業が写真付きでHPに掲載され、学芸員が自分の言葉でコメントしていることは、館の敷居を低くする上で効果を発揮しており、評価できる。</li> <li>・手法として斬新で、今後も継続してほしい。</li> </ul>
	貸出標本キットの充実	23年度は教員向け行事を実施し、学校のニーズの掘り起こしの後、ホネの貸出キットの開発を進めた。ホネの標本キットの完成が年度末になり、本格的な貸出は次年度からとなった。24年度は博物館の教員のネットワークづくりの強化を目指して、8月には「教員のための博物館の日」を開催し、104名の参加者を得た。アンケートでも、「とてもよかった 71%」「まあまあよかった29%」で満足度が高かった。「全国科学系博物館活動助成」を得て、2月に博学連携ワークショップを開催予定。	
	職場体験・学芸員実習の内容公開	博物館の活動を知ってもらうために、自然史博物館の様々な活動や学芸員の仕事を体験してもらっている生徒や実習生に受け身だけでなく、体験を表現してもらいBlogを作成してもらい、公開している。実習生に体験を書き込んでもらったブログを公開し、twitterなどでも反響をよんだ。	
6 広報・宣伝、情報公開と発信	ネット時代に則した新たな広報手段への取り組み	ブロッガー内覧会の実施、twitterやSNSによるPRに取り組み、23年度は特別陳列で5件、大化石展で7件、OCEAN展で9件、恐竜成長展で6件、ブログにおいて展覧会が紹介されたほか、ネットによるクチコミでの広報に成功した。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時代の変化に応じた広報手段をいち早くとりいれ、情報発信している。このことは、とくに新たな利用者層を開拓し、増やすことにつながるものであり、評価できる。今後も継続してほしい。大阪市博物館協会内で、この手法について情報交換し、他館でも導入可能なものは導入してほしい。</li> <li>・地下鉄音声ガイド、吊り革部分の広告、また現在行われているドア横のポスターも効果的である。予算の制約がある中苦労が多いと思われるが、今後も継続して実施してほしい。</li> <li>・今後の広報戦略の重要な柱である。大阪市博物館協会内で、この手法について情報交換し、他館でも導入可能なものは導入してほしい。</li> </ul>
	常設展も含めた館の一般認知度向上への取り組み	地下鉄音声ガイドの導入(最寄り駅案内放送)を実施して、長居駅で(14万8千人)を対象にのべ10,450回の告知放送を行った。特別展開催期間は特別展の案内をしており、入館者増につながっている。効果は十分に認められたが、広報の経常的な費用が不足しており、不安定であり、課題である。	
	ホームページやツイッターの取り組みにより特別展の広報強化し多数の来場者を獲得する	23年度はタイトルやポスターの工夫、ブロッガー招待の内覧会・地下鉄音声広告などの実施などに取り組んだ。展示の内容・意図が多くの人に伝わったと考えられ、特別展「大化石展」では30,159人の入場者があった。予想を越えた多数の来場者があり、目標を達成できた。24年度も継続しており、成果が出ている。	
7 地域、市民、関連機関との連携・交流	地域の自然に関する情報を持つ市民との幅広い連携構築	23年度は9月に全国から骨格標本制作に携わる団体が集結してのホネホネサミットを開催(科研費関連)、11月には大阪の自然関連団体が集まる自然史フェスミットを開催した。多数の参加者を得て公表のうちに開催し、当初の目標を達成できた。24年度は11月に大阪自然史フェスティバルを開催した。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サミットやフェスティバルの開催によって、市民を大きな仕掛けでつないでいく手法を高く評価する。ホネホネサミットは、骨格標本への注目度を高め、現在、各地の自然史系博物館での流行に先鞭をつけたという点で高く評価できる。また、24年度は自然史フェスティバルでは企業関係者の参加も多く、スーツ姿を常設展示室で複数見かけた。これまで自然史博物館を訪れたことのない層を開拓した意味でも高く評価できる。</li> <li>・博物館連携事業の核になっていることを高く評価したい。</li> <li>・博物館学芸員が30年以上にわたって育てた大阪湾海岸生物研究会の活動実績の上に成り立つ連携調査で、高く評価できる。今後も、様々な分野で各種機関や団体・地域市民と連携した調査・研究活動を展開してほしい。全国の博物館のモデルになる事業を実施していることを高く評価したい。</li> </ul>
	博物館連携	23年度は文化庁委嘱「うまいもんから考える自然の恵み」事業を実施した。食材を味わっての対談などを博物館内では実施困難な事業を市中で実施し、美術・歴史の話題を交えつつ豊富なコンテンツ提供を行った。冊子を市内小学校に配布、USTREAM配信を行うなど広がりのある成果を築いた。24年度は東日本大震災で被災した博物館の「標本レスキュー事業」で、4月のシンポジウムをはじめ、多くの博物館関連集会で博物館連携の重要性、自然史標本の重要性などについてアピールすることができた。	
	地域市民と連携した調査研究活動の実施	大阪湾生き物一斉調査の実施、大阪湾見守りネットによる大阪湾フォーラムの開催を主体となって実施した。行政(国土交通省、自治体)、大学・研究者、市民団体、博物館・水族館の間で連携が深まるとともに、地域社会における博物館の存在意義を示すことができた。	
8 施設の整備、維持管理、リスクマネジメント	中長期の改修計画	23年度は入館者及び職員等の安全確保のため、老朽化した館屋内部壁面について、本館入り口とネイチャホール、ギャラリーの内壁タイルの浮き上がりを調査し、改修工事を行った。定期点検が必要である。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全般的に施設は老朽化しているが、当面、中小規模の補修と改修で対応できるものとそれ以外の仕分けを点検によって進め、事故につながらないように、優先順位をつけて対策を進める必要がある。施設の状況は、施設設置者(大阪市)に定期的に報告し、改修が早急に進むように努めてほしい。</li> <li>・このままでは大きな問題が発生する可能性もある。とくに収蔵庫の空調は、資料を良好な状態で保管するために欠かせない。博物館機能の根幹にかかわる部分なので、早急に施設設置者(大阪市)と十分協議してほしい。</li> <li>・施設の老朽化度合いや問題点を十分整理し、施設設置者(大阪市)と緊急的な対応だけでなく、抜本的な対策についても十分協議してほしい。</li> </ul>
	老朽化機器の改修計画	23年度は空調機チラー三方弁の交換(収蔵庫系統)を実施した。市予算の制約から現在一カ所のみ交換にとどまっているが、全8箇所あり、早急な改修工事がのぞまれる。	
	緊急的な改修工事	23年度は雨漏り・漏水の防止のため、第2展示室の屋上防水を改修、一部の雨水排水管のバイパス工事、本館地下室の漏水対策を行った。雨漏り対策工事はやや不十分で、根本的な改修がのぞまれる。	

9 運営・マネージメント	館内各セクションの連携による事業効果の発揮	管理職連絡会、広報会議、フロアミーティングなど市派遣・協会職員だけでなく、館内各セクションの職員による会議の開催により、各事業やあるいは来館者からの要望・アンケートの分析などに来館者に接するスタッフの声を組み入れ、またタイトルなどを工夫することで大化石展の成功につながった。また全関係者をあつめての大化石展総括を踏まえてハチ展の成功につなげることができた。	<p>・情報の共有化によって成果をあげていることを評価する。</p> <p>・大阪市役所のシンクタンク機能を果たしていることを高く評価する。こうした社会貢献についても、積極的に広報、アピールするとともに、大阪府・大阪市・堺市などと共同した生物多様性施策を実現させるための後押しも期待したい。</p>
	行政的課題としての生物多様性地域戦略策定への貢献	23年度は、環境局が中心となって今年度中に策定予定の大阪市生物多様性地域戦略の策定に当館が参画し、情報やノウハウを提供した。その結果として大阪市生物多様性地域戦略案が、大阪市環境審議会の答申として大阪市に提出された。事務局の原案作成に専門的立場から意見を述べるとともに資料を提供し、内容を充実させることができたこと、庁内での当館の存在意義を示すことができた。引き続き、大阪市生物多様性地域戦略を実効あるものにするべく、つとめていきたい。	
10 α ※各館の特性が できるように、この 項目を活用する。	東日本大震災への緊急対応	<p>国内の自然史系博物館・関連団体と連携して被災資料のレスキュー活動に取り組むとともにその活動内容を市民に伝えることにつとめ、23年度には</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・被災地(岩手県)への学芸員の派遣</li> <li>・陸前高田市立博物館、海と貝のミュージアム他所蔵のさく葉・昆虫・貝類・地質標本の修復</li> <li>・現地ワークショップ派遣への協力</li> <li>・パネル展「今 地震・津波を考える」の開催(7/23-8/28)</li> <li>・ミニ展示「陸前高田市海と貝のミュージアム所蔵の貝類標本とそのレスキュー」の開催(3/2-6/3)</li> <li>・募金活動 などに取り組み、以下の教訓・成果が得られた。</li> <li>・緊急事態の中で積極的に情報を収集し、可能なことからただちに着手した。</li> <li>・西日本自然史系博物館ネットワークをはじめとする日常的な館相互、学芸員相互の交流の蓄積が力を発揮した。</li> <li>・結果を展示を通じて市民に広報し、標本の重要性を啓発することもできた。</li> <li>・自然史系博物館の中核的存在としての当館をアピールすることができた。</li> </ul> <p>引き続き、震災の教訓を今後活かすことを目的に活動を継続している。</p>	<p>・東日本大震災後すぐに始められた標本レスキューから現在に至るまでの活動は、日本の自然史系博物館のリーダーとしての役割を十分に果たしたと高く評価できる。今後は今回の震災の教訓や成果を、自館の災害対策に反映してほしい。</p> <p>・予算が厳しい中、博物館活動や生涯学習、社会教育の推進に外部資金を獲得して市民協働を進めていることを評価する。市民との協働は、パートナーと連携することによって相乗効果を高め、「社会の利益を最大化する」ことを重点目標とすべきである。これによって、より多様な市民の力を引き出すことができ、さらなる博物館の活性化が期待できると考える。</p>
	市民協働による博物館の活性化	博物館だけで実現できない、市民の発意を受けた協働事業を実現していくため、自然史友の会や大阪自然史センターによる日本財団やゆめ基金などの外部資金獲得とそれに伴う事業実施、地学団体研究会等による講演会の実施、市民の発意を受けた事業を科研費による博物館学研究の一環として実現した。特に23年度は、大阪湾に関する活動について重点的に行った。また、自然史フェスを協働の成果として実現できた。24年度からは自然史博物館に集まった自然に対する深い造詣を持つ市民の力をいかした、生物多様性施策を実現させるために大阪府・市・堺市などと共同した事業展開を始めた。	